
猫はコタツで丸くなる

水橋 哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫は「タツ」で丸くなる

【NNコード】

N3834N

【作者名】

水橋 哲

【あらすじ】

「タツ・ファンタジー

プロローグ

我が家のコタツからは色々なモノが出てくる。

昨日は、火薬式の縄文土器が出てきた。そこそこ無難な物で助かっただ。47cm砲の砲塔の先端部分がコタツ布団の端から出てこようとしていたから、慌てて押し戻したのは先週のことだつたっけか。このコタツを通して、あまりに沢山のモノと出会つたから、最近は大抵のことでは驚かなくなつた。

今日も、ミカンのペラミッドを押し戴いたこの場所で、両手をその脇に投げ出してくつろぐ。ペラミッドの上に、私の黒髪が覆いかぶさる。染めるのも、切るのも面倒だから、大分伸びた。

そして、午後11時00分。毎日、気だるくテレビの画面を見るのはこの時間と決まつている。いつもと同じニュースが流れる。内容もさして変わらないから、左から右へと情報も流していく。

結局、私にとって有益な情報なんか無い。

必要なものは、全てこのコタツから。願えば何でも出てくる。労働の汗もいらないし、精神を擦り切らす必要も無い。だから、私がこのニュースからは何も得る必要が無い。あるとすれば、出演中の局アナの持つ美貌位だろうが、それすらも望めばこのコタツから出てくるだろう。

本来、無形であるはずの情報すら、この赤茶けた布団と床の隙間から出てくる。脳細胞に直接アクセスされる電気的な感覚に最初は慣れなかつたが、今では快い感覚だ。それこそ、土曜日の朝、布団の中でのまどろみに似ているような気がする。

いやつて、寝そべつてさえいれば、私は幸せだつた。
全ての欲求はコタツが叶えてくれていた。

しかし、まあ、なんといつか…。

別れってのは突然来るものなのだな。

つづく。

「ひひ」でもなるだね。ジンセイなんて（一）

「氣だるくて、微熱があるようだ。

「死にたい」

「こう咳いておけば、なんだか気持ちが楽になる。」

人前で咳くのはアレだし、あんまり多用する言葉ではない。ネガティブな言葉は概して社会には受け入れられないものだ。

時計は午前6時半を廻っている。そろそろ布団から出なければ、きっと今日も「遅刻」する。

朝から氣まずい思いをするのは嫌だけれど、ここから出のを躊躇するのはきっと万国共通だらうね。もう少し、もつと粘つていたら、だんだんコロコロに黒いのが近づいてくる。

結局、思い切つて楽園を出るしかないのだ。

つい半年ほど前まで大学生だった楓は、この就職大恐慌の中で、運良く地元の会社に就職した。

あがり症の楓は、何だかんだで、面接大苦戦だつたけれど、何故かこの会社での面接は上手に出来た。その前に受けた、1対7の圧迫面接が功を奏したのかもしれない。やけに細長い会議室での光景は一生モノのトラウマである。

「あなたがこの会社でやりたいことは何ですか」

面接官、お決まりの台詞。

（そんなもの或る訳ないじゃない）

自らの素直な心の通りに答えたなら駄目なこと位は知つてゐる。そんなにバカではない。

「私は、御社で…」

ここまで喋つて頭が真つ白になつた。つい15分前まで、繰り返した呪文はどつか行つた。（私も逝つた…。）

まさに、失敗のお手本だった。

楓が記憶しているのここまでだ。

それから後は、モヤモヤした視界の中で、ひたすら中傷されたような気がする。

はっきり思い出そうとすると、有難いことに海馬のサーチキットブレーカーが発動してくれる。思い出した時点で、悶え死ぬことは確定だろう。死ななくとも、腹を十字に割腹し、見事に最後を遂げてみせる自信がある。

そんな大事故の直後だったから、上手く行ったのかもしれない。

（…いや、上手く行き過ぎた）

元来、社交的でないはずの楓が、どうして流れるように喋ることが出来たのかは、今でも謎だ。

何しろ、普通に話しているだけなのに、面接官は大爆笑。終始和やかな雰囲気で、恙無く面接は終わった。

今、考えてみると、そんなに難しいことは尋ねられなかつた。仕事のことを訊かれた覚えは無い。

それに、楓自身、半ばヤケクソで受けた面接だから、無駄な氣負いも無かつたのかもしれない。

そんなこんなで、楓は1人の大学生から、地元の1人の新入社会人にジョブチエンジしたのだった。

考えてみれば、これが全てのハジマリであった。

「いいでもなるだね。ジンセイなんて（ニ）

何しる、指示されてこることがまったく理解できないのだ。
もつとざつとつと言えば、言つてこることがチンパンカンパンで、
わっぱりなのです。

必死にやるうとすればするほど、楓の行動はますます奇怪な側に
落ちていく。普段出来てることよりも、何故か出来なくなつてしまつ。

この前は、田で釣銭を確認したにも関わらず、100円多いお釣
りを要求して、社長に呼び出しを喰らつた。

「どうしてそんなことも出来ない」

（いや、私にも解らないですよ）

…とは言えず、楓は黙つているしかなかつた。

「下手に喋ると、なんだかボロを出してしまってどうだつた」なんて
いう狡賢い余裕は彼女には無かつた。

彼女は極端にこついう場に弱かつた。とにかくメンタルが弱かつ
た。もう弱いなんてもんじやない。こついう場になると、楓はいつ
も黙りこくつてしまつた。

こずれにしる、自分が怒つてこることに相手が黙つてしまえば、基
本的に誰でもフラストレー・ションが溜まつてくる。

この場合の社長も常識の例外の人ではなく、黙つたままの楓に対
して、煮えたぎるそれを確実に溜め込んでいた。

「君は、この仕事に向いていないんじゃないのか」

（じゃあ、採用したのは誰だよ）

「どうして電卓を左で打つんだ。右で打ちなさい、右で」

（わつやつて打てばいいと、金出して買った本に書いてあつたんで
すよ、コノヤロー）

そんな木靈が十数分、2人の会議室に響いていた。

最後に、社長は、

「身の振り方を考えておけ」

置物になつた楓に向けて、赤くなつた社長はそつ言つと、会議室の扉を無造作に閉めて出て行つた。

しばらく、楓はそのままだつた。
真つ白になつた脳細胞の活動が復旧するのに、それなりの時間が必要だつた。

黙つて、自分の中を見つめる。

何も無い白い空間と黒い闇の空間が交叉しては渦巻く。
考えがまとまらない。

結局、私は何も出来ない、無能で馬鹿なうそのうだといつ現実と向き合つしかなく、黒いほうが幾分勝つてしまつ。

真つ白なはずの私の人生は、もうどす黒く染まり出したようだ。
(もう終わつた。逝つたな)

そういう風に置物が考えていると、再び社長が会議室に入つてきて、言つた。

「いつまでそうしている。早く仕事に戻れ」
私はもう真つ黒になつた。

独りで考えると鬱になるだろ、そりゃあ（一）

その日、楓は家に真っ直ぐには帰らなかつた。帰り道とは逆方向。郊外のショッピングモールのスーパー・マーケットの片隅に居た。

目の前で、残酷な天使のテーゼが鳴り響いているような気がした。いや、実際、五月蠅い位に大音量で鳴つていた。

メダルがジャラジャラと音を立てて出てくる。まだ、100円しか入れていなし、座つてまだ1分とも経たない。（こういうときに限つて出るんだよな。しかも、メダルなんかもらつてもナ）

そうは思つたが、せっかく出でくるといつのに、無下に断るのももつたない気がしたようで、楓はじつと座つていた。

ムシャクシャすると、いつやつて意味の無い浪費をするのが、楓の癖だ。

しかし、こんな時に使う必要の無い運も一緒に浪費してしまうのも楓の「癖」だった。

（勿体無いよ）

と、楓はずつと思つていた。

小さい時から、ずーっとこんな感じだつた。

良いことと悪いことが、同じタイミングで来るので、なんだかんだで相殺されてしまう。

だから、何かを手に入れても、同時に掌の中の何かが出て行つてしまい、一定以上幸福になれない。その逆、一定以上不幸になることも無いから、見方によつては幸せのなのかもしれないが…。

楓は、自らのこの奇妙な現象を密かに「幸福質量保存の法則」と呼んでいた。

そう呼んで、独りで悦に入つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3834z/>

猫はコタツで丸くなる

2011年12月26日22時57分発行